

じやりみち

…被災地支援情報…



第60号 発行日 99.5.10

被災地NGO協働センター

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6

TEL:078-685-0068 / FAX:078-685-0071

E-mail:SHB00846@nifty.ne.jp

口座番号:01180-6-68566 (郵便振替)

新緑あざやかな、風薫るさわやかな季節となりました。いかがお過ごしでしょうか。最近はちよつと発行間隔の間延びしている「じやりみち」ですが、新しい年度に合わせ、内容など新たに検討している最中です。今後ともよろしくお願ひいたします。

5年目を迎えたKOBEから 被災地における市民による仕事づくり

阪神・淡路大震災から5年目を迎えた今、すべての分野で一休み感～私たちは「踊り場」と言っていますが～の漂う中、これまでの4年間を振り返って、5年目の道筋をどうつけていくかという議論をしてきました。今後の課題としては、働く場の確保と、まちづくりの求心力・エンパワメントをどうやって起こすか、この二つだらうと私たちは整理しています。

まず、働く場がなくなってきた。もちろん長引く不況の影響もありますが、兵庫県の有効求人倍率、失業率、事業所の倒産件数は、全国でも最悪という数字が出ています。

もう一つのまちづくりの現状としては、土地区画整備事業として認知されて、仮換地など進めてくる中、ようやく換地作業がほぼ終わりました。そうすると、始めは「こんなまちになったらいい」というような多少の希望や夢のある議論をしてきただれども、実際に共同化住宅を建てるという段になると、どうしても個人個人の問題になってくる。

こういう要素で、まちづくりの求心力がどんどん委えてくると言うのが現状です。

もちろんまちづくりプランナーの中には、非常にいい視点を持って、住民が中心になったまちづくりを仕掛けている方も数人います。

特筆すべきは西須磨と住吉浜の2地域だと思います。西須磨では道路公害に反対するという運動から住民が結束されていったし、住吉浜は火力発電所の建設に反対するという住民運動から、まちづくりの求心力が生まれてきました。これらのまちづくり運動と、震災で町がつぶれたからもう一回まちを起こそうというきっかけで起こったまちづくりのパワーとはだいぶ違うわけです。

私たちは大きなことはできません。

ただ小さな愛をもってやることはできます。(マザー・テレサの言葉より)

有名な真野地区も、兵庫運河の水質汚濁、大気汚染などの環境問題からまちを守ろうと生まれたコミュニティが、震災の時に非常に役に立ちました。震災後に振ってわいたように“理想的なコミュニティ”と言われていますが、震災前からあったのです。

ただ、昔というか、1960・70年代の単なる要求・糾弾という運動の展開ではなくて、例えば住吉浜の場合、まちの再建をしていくのに、旧来の自治会のリーダーがいて、まちづくりに関してはその人と新住民と対立するけれども、火力発電所建設についてはどちらも「かなわん」と言っている。そんな共通課題から、対立を解消しながらまち再建を仕組んでいく。そういうことはむかしと違う形の合意形成ではないか。そこにすばらしいプランナーが入って仕掛けているので、そういう結果が出ているのだろうと思います。

働く場の確保という部分に関しては、全体的に事業所が減っているのでなかなか難しい。特に神戸市長田区はケミカルシユーズ、鉄工業などの零細事業主が多く、震災で打撃を受けた上に不況が覆い被さってきましたから、なかなか抜けきれない現実があるように思います。

そんな中で、被災地の復興を考えたときにどういう仕事を起こしていくのかが課題です。 (次ページへ)



5年目を迎えたKOBEから

被災地における市民による仕事づくり

(前ページより)

そこで、5つほどの市民活動団体が集まって「市民しごとづくり研究会」というのをつくって、いろいろ話し合っているのですが、市民がつくりだす仕事といつても、被災地の労働力にどんなものがあるか、どんな仕事が適切なのか、そんなことを検討しなければならない。

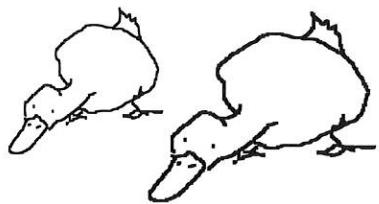
それには、私たちの発想だけでこういう仕事がいいだろうというだけでなく、被災者にアンケートをとって、その分析から新しい仕事の発送が出てくるのではないかなど、いろいろな仕掛けを考えています。

ただ、職業という域まで行くかどうかは、今の段階では何とも言えません。収入が非常に低いレベルの仕事でしかないかもしれない。でも、そこから少しづつ階段を上っていく形で、いうところの生業とすることが可能ではないか。そう期待している部分もありますが、まだきちんと見えているわけではありません。

たとえば、全国的に商店街の活性化が言われています。特に被災地の場合、市街地に人が戻ってきていませんから、市街地の商店街は軒並みアウトです。震災前の



▲今年1月17日に行われた「1.17 KOBEに灯りを」。こんなイベントの中からも、仕事につながるヒントを探っている。



売り上げが半分も戻ってこないという現状で、息絶え絶えという表現が一番ぴったりではないかというくらい、非常に厳しい状況です。

先にアンケートの話が出ましたが、例えば男性は、釣りが好きな人が非常に多い。釣りが好きだということは、同時に魚も捌ける人が多いことが分かりました。これは面白いんじゃないかな。神戸では昔の魚市場みたいな部分がなくなっていますから、たとえ一週間でも、空き店舗を使って新鮮な魚を売る市場を再現する。あるいは他の空き店舗では、手芸の得意な人たちが集まってグッズを売る。そういう形のものが出来るのではないか、というふうに思っています。

また今年の1月17日に、市内の公園で「1.17 KOBEに灯りを」という追悼の集いを行いました。竹筒にロウソクを浮かべて、一万数千のあかりを灯したのですが、この一万本の竹筒を生かして、何かつくることが出来ないだろうか。今は竹の炭、竹炭を考えているのですが、うまくいったら六甲山に炭焼き小屋を立てて、自然の中で隠居生活を送ろうか(笑)、なんて計画もあります。

私たちの場合、最初にミッションを考えてやるわけではなく、行け行けどんどんで行くものですから、失敗も多いし、逆にいいヒントが出てくる場合も多いのですが、とにかくやってみようということで考えています。

ただ、本当に定着させて、行政からも市民からも評価を得るためにには、それなりの戦術と戦略を組まなければならないだろう。でもそれはあっても、お金の限界と、お金をもらう以上、期限を伴ってくるのでそこが辛い。自らのお金を持って、プランニングに充分時間をかけてやっていった方が面白いだろうと思っています。

そういうアイデアをきちんと詰めていけば、研究会の具体的なプロジェクトとしてやれるのではないだろうか。当初の収入はそんなに多く得られないかもしれないけれども、コミュニティビジネスというか、スマールビジネスというか、以前のような重厚長大型の産業で動かしていくのではなくて、地域密着型のビジネスを起こしていくのではないだろうか。そのことがまちづくりの求心力にもう一度つながっていくのではないか、というふうに考えています。

(被災地NGO協働センター 村井雅清)

《仮設は今...》

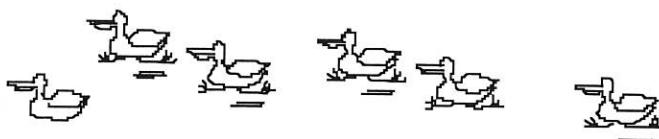
東灘区編

阪神・淡路大震災の仮設住宅は、この3月末で災害救助法に基づく使用期限が終了しました。仮設住宅を設置している兵庫県が再度の延長を申請しなかったためですが、県ではその後3ヶ月間を「移行措置期間」とし、戸別あっせんなどを進めながら、6月末までに仮設住宅を解消する意向です。住民の憩いの場となっていたふれあいセンターも、この3月末から4月はじめに多くが閉鎖され、あちこちの仮設で住民やボランティアのお別れ会が開かれました。

東灘区の浜仮設は、3月末でふれあいセンターが閉鎖され、5月5日には全入居者が引っ越しを済ませました。

災害復興住宅や新しい転居先では運良く仮設の時の知り合いと近くに住むことができ、良かったと喜ぶ人もいます。反対に新しい住まいに移っても隣近所とのおつき合いがなく、早く仮設から出たかったけど、やっぱり淋しく、仮設の方が良かったという人もいます。特に男性は近所付き合いが女性のようにうまく出来ず、辛い生活を強いられている方が多いようです。仮設にあつたふれあいセンターのようにいつでも誰でも気軽に交流できる「場」があればという声があります。その上、災害復興住宅の高齢化率は一般の住宅の3倍から4倍ともいわれ、コミュニティづくりにはかなりの時間がかかりそうです。

災害復興住宅は郊外やへんぴな場所の広大な土地に建てられることが多く、買い物をする所や病院も少なく、交通も不便で住民、特にお年寄りは家に引きこもりがちになるというケースが増えています。



いくら「モノ」が復興しても、ひとの「ココロ」の復興はそう簡単には行かないのです。このことは仮設ができ、孤独死が多く発生したときによく分かっているはずです。しかし、行政はまだ同じ過ちを繰り返しているのです

震災で得た教訓を一つずつ着実に生かすことが残された私たちの責任でもあるのではないでしょうか。これ以上尊い命を失いたくはありません。

5月6日には、また仮設住宅での孤独死が発見されました。死後3日で発見されたこの女性は、まもなく復興住宅に転居する予定だったそうです。兵庫県内での孤独死は233人となりました。なぜこのようなことが起きるのでしょうか。それは孤独死の前には「孤独な生」があるということです。コミュニティという人のつながり、孤独を感じさせない環境づくりがなければ、新しい転居先に移っても「孤独な生」は増え続けるでしょう。支援のあり方、コミュニティのあり方をもう一度問い合わせてみると必要があると感じずにはいられません。

(被災地NGO協働センター 増島智子)

330世帯が転居先未定

仮設住宅
入居者 期限後も3,861戸

兵庫県は7日、仮設住宅の4月1日現在の入居状況をまとめた。倉庫利用を除いた入居者は3861世帯(前月比948世帯減)で、ピーク時の8.3%となり、初めて1割を切った。うち約330世帯は移転の見通しが立っていない。県は3月末の使用期限後も仮設に残る世帯に対して、「即時退去を求めるのは難しい」として、6月末を仮設解消の目標とし、住宅のあっせんを急ぐ方針。

入居者の内訳は、神戸市=3,415世帯(うち被災地外の仮設に59世帯)、△西宮市=436世帯(同4世帯)、△明石市=6世帯、△津名郡北淡町=4世帯。移転先が決まっていないのは、神戸市288世帯、西宮市119世帯の計407世帯いるが、西宮市の約80世帯は内定段階にあり、残る世帯

に対しては住宅あっせんが続いている。このほか、担当者が入居者に会えなかったり、意志表示がなく把握できていない「不明」分が37世帯ある。

県住まい復興推進課の調べでは、移転先が決まっている入居者でも、住宅の完成が7月以降になるケースが約550世帯あり、県などは民間賃貸住宅への一時入居あっせんなどを進めていくという。

倉庫利用は、前月より81減の149世帯。

仮設住宅は634団地あったが、336団地は撤去済みで、47団地は部分撤去している。

(1999年4月7日 神戸新聞夕刊)

被災地支援情報

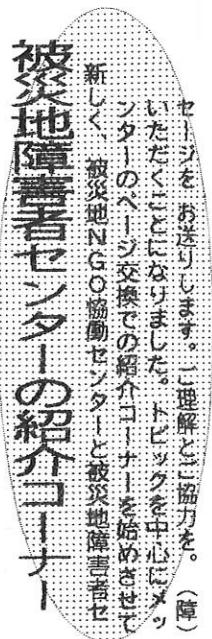
被災地障害者センター

情報発信のコーナー

被災地障害者センターは、震災直後の1995年2月に発足しました。障害者の生活支援コーディネートや移送サービスなど、障害者があたり前に生きるための生活・地域づくりを目指して活動しています。

被災地障害者センターは、被災地NGO協働センターの前身である「仮設住宅支援連絡会」の発足当初より、ともに被災地での活動を続けてきました。昨年から障害者センターの通信に、被災地NGO協働センターのページを頂いていたのですが、今年度からは「じゅりみち」にも障害者センターの情報発信のコーナーを設け、お互いの記事の交換を始めました。ひと味違ったインフォメーションをご期待下さい。(被災地NGO協働センター 福田和昭)

被災障害者支援【ゆめ・風基金】発足4周年記念 連続企画【ゆめまつり風フェスタ】



**怒濤の
七
忘
ませ
ん!**

今こそ語ろう 夢と道。
「私たちは これからどこへ行くのか?」

**バザー/屋台/模擬店
スタッフ 募集中**

5月16日(日) 午前11時スタート

ゆめまつり「KOBE灘で語ろう未来を!」講演と音楽の集い

永六輔 講演会 & 落語・笑福亭伯鶴 午後2時 開演

会場/こうべ甲南 武庫の郷 本館 (JR「六甲道」南へ10分、阪神「新在家」東へ3分)
入場料/2000円 前売りのみ

お楽しみ広場(本館よこ)のコンサート、バザー、模擬店、屋台11:00~17:00 無料
ソウルフラー、モノノケサミット、おーまき、ちまき、むらあき、ほかの皆さん

〒533-0033 大阪市東淀川区東中島1-21-2-1107 日区片山町2-17-9
TEL 06-6324-7702 FAX 06-6320-6068 42-0142 fax 078-642-0942

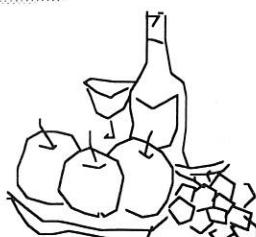
総合司会 趙博



笑福亭伯鶴

被災地障害者センター・情報発信のコーナー

甲府の街にて



3月初め頃、甲府へお邪魔した時のこと。仕事を一段落させて、さあ飲み屋へ。入ったお店のカウンターで、話しかねていると笑顔でお母さんが話しかけて来くれます。いつもの調子で話していると、「何の仕事をしているの?」というお母さんの質問に、よしきた!とばかり『まけないぞう』を売り込んでみました。するとまたまた笑顔でお母さん、「なに、そうなの。それなら私も」とぞうさんを注文してくれました。その時の一言が忘れられません。

「人と人って、どこでどうつながるかわからないもんだねえ。私はここで仕事が出来るのも、そういうつながりがあるからだと思ってるの。こういうのって支え合いなのよね」

ちょっととしたところで人が人と出会う。ごく自然なことと過ごしているけれど、自分の中の新しい世界が広がる瞬間であり、世界がつながっていく瞬間でもあります。

「人と人とが『つながり』あって、支え合っていく。」お母さんの言葉が胸に染みました。

(被災地NGO協働センター 鈴木隆太)

中米ホンジュラス北部 ハリケーン被害

**緊急
救援**

中間報告



▲ペルタグランテ村でのトンタン板配布

<募金の振込先>

▽郵便振替

口座番号：00970-7-39728

加入者名：

阪神大震災地元NGO救援連絡会議

*通信欄に「ホンジュラス支援」と明記下さい

昨年10月末に、中米一帯をハリケーンが襲い、各地に甚大な被害をもたらしました。被災地のホンジュラスに滞在していた宝塚出身の金井優子さんより支援の呼びかけを受け、昨年12月に緊急救援実行委員会を結成、これまで支援活動を続けてきました。

ホンジュラス北部の被災地では金井さんと、後から被災地入りした土屋敦さんとで活動。ハリケーンで鉄砲水に見舞われながらも、支援の手が届いていなかった、ペルタグランテ村(戸数35戸)や周辺の村落で支援を展開しました。屋根をふくトタン板や釘を全戸に配布し、村民の栄養を補うために家庭菜園用の野菜の種子を配布しました。

金井さんと土屋さんはそれぞれ2・3月に日本に帰国しましたが、金井さんはこの7月に再びホンジュラスに戻り、活動を再開する予定です。支援が物質的なものに終わるのではなく、それによって多くの人が自分たちの未来に希望を持ち、自立して自分たちの力で生活再建が出来るように、彼らと共に協働で活動を進めていきたいと考えています。

中米ホンジュラスハリケーン被害・ 緊急救援実行委員会

連絡先：被災地NGO協働センター気付（鈴木・細川）

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6

tel078-685-0068 fax078-685-0071

南米コロンビア地震被害緊急支援

続報

今年1月25日に発生した、南米コロンビアでの地震において、「じゃりみち」2月号同封のチラシで、救援のための募金を呼びかけさせて頂きました。

そして今回、現地での募金の受け入れ団体が決まり (Ser viviendaといふ現地のNGO) 、その団体が行う現地でのケアセンター設立のための費用として使用されることになりました。なお使途については、建設のための費用以外に、ケアセンターでのプログラムのための経費として利用していただく予定です。

また、上智大学のコロンビア出身の教授が現地のSer viviendaと当委員会の仲介役を担ってくださることになりました。

今後、8月頃に委員会からスタッフを派遣して現地の状況やSer viviendaの活動状況等を視察する予定です。

これからも引き続き募金を呼びかけますので、よろしくお願ひいたします。

なお「NGO災害救援金」は使途を当委員会に一任して頂く募金で、今回は昨年10月に起きた中米ホンジュラスでのハリケーン被害に対して使わせて頂きます。引き続き支援を続けていく予定ですので、そちらのほうも合わせてお願い致します。



<募金の振込先>

▽郵便振替

口座番号：00970-7-39728

加入者名：

阪神大震災地元NGO救援連絡会議

*通信欄に「南米コロンビア支援」か「NGO災害救援金」のどちらかを明記して下さい。

南米コロンビア地震被害・ 緊急救援実行委員会

連絡先：被災地NGO協働センター気付（鈴木・細川）

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6

tel078-685-0068 fax078-685-0071

…被災地支援情報…

災害救援から見えてきたこと

～中米ホンジュラスの緊急救援から～

昨年10月末に発生した中米ホンジュラスでのハリケーン災害。同国で孤軍奮闘されていた金井優子さんを通じての支援活動を始めてから約5ヶ月が経過しました。これまでの私たちの活動では、現地で活動する団体と手を携え、そこを通じての支援を行うのが常でした。しかし今回は、直に現地に携わる個人からのSOSを受け、現地で一から活動を模索する、これまでに例のない展開となりました。

<KOBEから現地へスタッフ派遣>

現地との連絡を密に取るため、土屋さんが現地に入り、週2~3回の電子メールのやり取りを続けました。タイムリーに伝わる現地の状況や、間近に接している住民の表情……新聞やテレビと違った、不思議な臨場感がありました。現地とKOBEのスタッフで意見を交わしながら、支援活動の方針を決めていきました。

<見えてきた救援活動の問題点>

このハリケーン災害では、救援活動のいいところばかりではなく、問題点もまた、提示されました。それは救援活動の在り方です。被災地には「援助漬け」になってしまった現地の人々があり、現地の状況を判断しない欧米のNGOの姿がありました。

港町に船を横付けして物資をおろす。そして被災者のそれぞれの状況を判断しないまま、物資を配る。本当に困っている人のところへは物資が届かずに、横流しされた物資がそのままスーパーなどで売られている。また調査に来るだけ来て、その後のフォローが何もないNGO。金井さんと土屋さんは、そんな状況に憤慨しながらも、自分たちに出来る最良の方法を考え、悩みながら支援の道を探っていました。

「自分たちはあんな無責任な救援活動は出来ない」そんな想いを糧にしながら、被災地の中でも特に支援の薄い地域の調査を始めました。住民の状況を把握するための戸別訪問の中から、本当に支援が必要なのかを判断し、住宅再建のためにトタン板と釘の配布を決定。住民と共に街から車を乗り継ぎながら資材を運び、村の集会に来られない人にも後日直接訪問してトタン板と釘を配つてまわりました。

現地の人々の立場になることは出来ないけれど、現地の人々の立場を考える。当たり前なんだけど、とても大切なことを、現地の活動を通じて改めて考えさせられました。

<今後の救援活動に備えて>

今回のホンジュラスへの支援は、私たちにとって貴重な財産になりました。それは、小さな小さなNGOの取り組みに過ぎないかもしれません、1つ1つの小さな力が寄り集まって、少ないながらも確実に現地の状況に即した対応を続けてきたということです。まさに「大きなことはできないけれど、小さな愛をもつてすることはできる」というマサテレサの言葉のように。

ハリケーン被災のホンジュラス

田子女性が救援報



現地の様子を語る金井さん



宝塚出身の金井さん、4か月奔走

配布した建築資材で建てた家の前で住民たちと写真を撮る金井さん（後別中内）

昨秋、大型ハリケーンに見舞われた中米ホンジュラスで、救援活動にあたっていた宝塚市出身の金井優子さんが、一時帰国した。神戸市中央区の神戸YMC（阪神大震災の光景を見つめたという金井さんは、何の手帳などと約四か月間奔走。現地報告会を開いた。住民の窮屈な阪神大震災の光景が重なったという金井さんは、何の手帳などと約四か月間奔走。七月に再び現地入りするのを前に活動内容を振り返り、「住民たちが希望を持てるやうな長期的視点で活動を続けたい」と語った。

阪神大震災宝塚市で経験した景を目の当たりにして、「多くの人に金井さんは、スペイン語の勉強の日々を助けてくれたよ」と話した。

「私が私たちを助けてくれたよ」と話した。募金の窓口は郵便振替口座「阪神大震災元N.G.O救援連絡会」と記載された。一方で、電子メールで友人らを支えていた。贈られた家並みすべてを失った。泥水の地面にまみれて座っている人々……。そんな光

金井さんの呼びかけで、「被災（078-6000-0060）。

8月（00970-7-3072）

（通話欄に「中米ハリケーン」と明記。問い合わせは同センター（078-6000-0060）。

（1999年3月11日 読売新聞）

「モノの支援」ではなく、本当に必要なのは「心の支援」なのだと、今回の救援を通じて、感じることが出来ました。地球の裏側の出来事がこんなに身近に感じられるのは、金井さんや土屋さんをはじめ、そういう人々が集まつて救援活動が出来たからこそだと思います。

この経験を活かして、今後の活動も「いかに現地の状況を把握した上で、いかに的確な救援活動をしていくのか」を私たち自身が納得できるよう、また支援者の方々にも納得して頂けるような活動をしていくことが大切だと改めて感じています。

（被災地NGO協働センター 鈴木隆太）

「住民たちが希望持てる活動続けたい」

....被災地支援情報....

震災がつなぐ全国ネットワーク



震災から学んだことを活かし、つないでいきたい……そんな思いと支援者の輪から生まれたのが「震災がつなぐ全国ネットワーク」。東北から九州まで、民間の草の根ネットワークをもとに、震災の検証や国内外の災害の救援活動を行っています。

◆What's 「震つな」?

これまで何度か記事を載せてきましたが、改めて「震災がつなぐ全国ネットワーク(通称：震つな)」の紹介をしたいと思います。

「震つな」は、阪神・淡路大震災以後の救援活動から学んだ多くの教訓を生かし、今後の災害に対しても出来る限りの救援活動を緩やかなネットワークを生かしながら行うことの目的として発足しました。現在は東北から九州まで、全国12団体が参加しています。

昨夏から秋にかけて全国各地を襲った水害では、被害を受けた各地域の団体がボランティアセンターの設立の中心的存在となり、またネットワークを生かした人・物・金・情報の融通や、阪神・淡路の経験を生かしたノウハウの提供などは、各地の救援活動に大きな役割を果たしました。

◆KOBEの検証シリーズ

平常時の「震つな」はみんなで集まって、互いの情報交換や災害ボランティアのビジョンを話し合ったりしています。また震災の教訓を生かすために、各地で講演会やシンポジウムも企画しています。

そんな中で注目を集めたのが、災害救援の検証の成果をまとめたブックレット、「KOBEの検証シリーズ」です。昨年刊行された「救援物資編」は、名古屋のチームを中心に全国のつながりを駆使した編集が行われました。災害時の救援物資の功罪に鋭く切り込み、物資の送り方・受け方・配り方を提言したこの



▲KOBEの検証Part2「ボランティアが来たぞう!! 考えたぞう!!」A5版64ページ・600円。Part1の「物資が来たぞう!! 考えたぞう!!」も好評発売中。問い合わせは被災地NGO協働センターまで

冊子は、新聞各紙でも好意的な紹介を受け、初版3,000部を一ヶ月で完売。自費出版では異例の増刷も行いました。

今年1月に刊行された「ボランティア編」は、栃木・福島・東京のチームが中心となって編集。震災当初から救援活動に携わったボランティアや各方面の専門家ら60人を超える人々の知識や経験が凝縮されました。災害時のボランティアコーディネーター必携の1冊として、こちらもまた初版を完売しそうな勢いです。

現在は来年1月17日の発行を目指して、Part3の「金編」の編集が、神戸を中心進められています。

◆震つな全体会/災害ボランティア全国フォーラム高知大会

年2回行われている震つな全体会～みんなの集まり～が、この5月末に南国土佐の高知県高知市で開催されます。高知市は昨秋の水害の被災地でもあり、30日には「災害ボランティア全国フォーラム高知大会」として、'98高知水害の検証と今後の災害救援のあり方について考える企画が催されます。

どなたでも参加できますので、近くの方もちょっと遠くの方も、ぜひぜひ高知に集まりましょう!!

この機会にたくさん仲間を増やしませんか。

◇災害ボランティア全国フォーラム高知大会

○日時 1999年5月30日(日) 10:00～16:00

○内容	10:00～	開会
	10:30～	基調講演：村井雅清（震つな代表）
	11:30～13:50	分科会 「結ぶ・つなぐ・紡ぐ・支援・絆」
	14:30～16:00	パネルディスカッション コーディネーター：山崎水紀夫 (9.24高知水害協働ボランティアセンター代表) パネラー： 石井布紀子（震つな事務局長） 橋本大二郎（高知県知事） 橋本達広（プロジェクトV代表） 山口隆朗（安芸自動車学校社長）
	16:00	終了

○場所 高知市保健福祉センター(JR高知駅・徒歩10分)

○参加対象 どなたでも参加できます

○参加費 500円(資料代/昼食費)～カレー用の食器を持参して下さい

○主催 災害ボランティア全国フォーラム高知大会実行委員会
震災がつなぐ全国ネットワーク

○共催 NPO高知市民会議、9.24高知水害協働ボランティアセンター、高知NPO、プロジェクトV

○問い合わせ

災害ボランティア全国フォーラム高知大会実行委員会事務局
高知県市民活動サポートセンター内 NPO高知市民会議
高知県高知市本町4-1-16 高知電気ビル2F
tel:0888-20-1540/fax:0888-20-1665

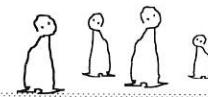
○申込締切 1999年5月25日(火)

※なお、前日の5月29日(土) 13:00より、同じ会場で「震つな」の全体会/総会が開かれます。全国各地から数十名のボランティアが集まり、夜は大交流会が予定されています。こちらのお問い合わせは被災地NGO協働センター(福田)まで。

…被災地支援情報…

震災から5年目の

公的支援を考える



この4月5日、昨春成立した被災者生活再建支援法に基づく都道府県の基金が発足しました。この日以降、日本国内で災害が起きた場合、同法に基づき、被災世帯への支援が行われることになります。現物支給が原則だった日本の被災者支援策の中で、初めての現金給付制度の創設です。阪神・淡路大震災の発生以来、各方面で議論が進められてきた「公的支援」が、ようやく一つかたちとなつてスタートしたわけです。

最もこの法律では、当初被災地の市民が求めていた要求が全て認められたわけではありません。給付額は大幅に引き下げられ、右の表に見るような厳しい収入制限が導入されました。また支援法で支給されるのは、家電製品など生活必需品の購入資金なのですが、最大の課題でもあつた住宅再建への取り組みへの支援は先送りされ、今年2月になってようやく国土庁が検討委員会を設置したばかりです。そのほか災害救助法の運用や総合的な基金制度など、災害時の公的支援の課題はまだまだ多くが手つかずのまま残されています。

雲仙・奥尻の被災地から多くの教訓を受けたように、阪神・淡路の被災地から、その経験に基づく提言を発していくのはKOBEの責務でもあります。これらの課題を乗り越えるため、これからもKOBEからの発信を続けていこうと思います。

ご入会ありがとうございました

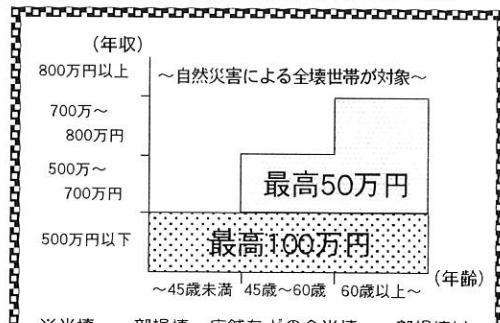
(敬称略・'99年2月23日~4月20日)

【個人会員】栗本 和幸

【賛助個人会員】中西 泉

【賛助団体会員】ぐるうぶ温.JOCS関西事務局

新規入会・継続会費については、お気軽にセンターまでお問合下さい

生活再建支援法による
被災者への支援金額と対象

※半壊・一部損壊、店舗などの全半壊・一部損壊は支援の対象外。
※年収800万円以下の要援護世帯には世帯主の年齢に関わらず支援金を支給。

新規会員募集 &
継続会費納入のお願い

★団体会員	年会費￥10,000×1口以上
★個人会員	年会費 ￥3,000×1口以上
☆団体賛助会員	年会費￥10,000×1口以上
☆個人賛助会員	年会費 ￥3,000×1口以上
☆自由選択会員	任意の額

センターの動き 3月～4月

3/4(木) 3・4フォーラム(三宮・勤労会館)

3/6(土) センター会議

3/9(火) 村井くん・智子、長島高校(三重県)で講演

3/10(水) 中米ボジュラ緊急救援報告会/市民しごとづくり研

3/11(木) しみん基金設立準備委員会

3/12(金) センター会議

3/13(土) 村井くん、岩木町・青森市(青森県)で講演

3/14(日) 野口法蔵氏講演会

3/15(月) 岐阜県中津川市立第二中学校研修受け入れ

3/17(水) センター会議

3/20(土) KOBEの検証PART3『金編』編集会議(名古屋)

3/23(火) ぞうミーティング

3/24(水) センター会議

3/31(木) しみん基金設立準備委員会

4/1(金) 市民しごとづくり研究会

4/5(月) 災害救援研究会/フレッシュ・プロジェクト事例検討会

4/8(木) ぞうミーティング

4/10(金) センター会議

4/13(火) しみん基金設立準備委員会

4/15(水) センター会議/市民しごとづくり研究会

4/17(土) 4.17モニュメントウォーク参加

4/18(日) 震災がつなぐ全国ネットワーク役員会(SVA)

4/21(水) ぞうミーティング

4/22(火) ぞうミーティング/フレッシュ・プロジェクト事例検討会

4/25(日) 四国キヤラバン高野山到着(和歌山)

4/26(月) センター会議

4/28(水) 市民とNGOの「防災」国際フォーラム実行委員会

4/30(金) しみん基金設立準備委員会

編集後記とこれからのこと

前号の発行からまた2ヶ月が過ぎてしまいました。まずは発行が遅れてしまつたことをお詫び申し上げます。

震災の年の夏に創刊したじやりみちも、今回で60号を迎えました。A4版1ページ・FAXで20部ばかりを送信していた創刊号から、現在はA4版6~8ページ・郵送で1,900部を数えるほどになりました。実は1999年度を迎えるにあたって、これからこの「じやりみち」をどうしていくか、発行の回数や内容などを再検討してきました。そこで今年度から、これまで1ヶ月に1度だった発行回数を、2ヶ月に1度にすることにしました(すでに実態がそうなっていますが……)。そのかわり内容はこれまで以上に吟味して、より中身のある「被災地発」の情報を盛り込んでいくつもりです。細かい発行日までは決めていませんが、確実にお届けしますので楽しみにして下さい。また緊急災害などの時には、この発行間隔にこだわらず号外などを発行していく予定です。なお、近いうちに被災地NGO協働センターのインターネットのホームページも立ち上げる予定です。こちらの方もまた、ご期待下さい。

♥おかげさまで第13号！！♥

ぞう 通信。

発行所：神戸市中央区東川崎町7-2-6 ☎650-0044
被災地NGO協働センター

第13号 1999.5.10



約2ヶ月間にわたった「まけないぞう・ありがとう
キャラバン」は皆さんのご支援・ご協力のおかげで、無
事終了しました。また今では「まけないぞう」は8万頭
を越え、もうすぐ10万頭を迎えます。本当に皆さん、あ
りがとうございます。

メ支
ツ援
セ
ジ
者
か
ら
の

一本のタオルが結ぶ
たくさんの人の輪を思う時、
忘れずに思い続けることの
尊さを感じずにはおれません。
スタッフの皆さん、本当におおきに！

タオルを寄せて下さった
福岡県須恵町の小学校PTAの方より

「まけないぞう」づくりが 仮設住宅から復興住宅へ

今まで東灘区の浜公園仮設と住吉公園仮設で
「まけないぞう」作りが行われていました。けれど今年の3月末での仮設解消に備え、ふれあいセンターが閉鎖されました。ふれあいセンターは仮設住民の憩いの場、交流の場、「まけないぞう」作りの場として住民に親しまれてきました。

現在、作り手は復興住宅への転居を終え、それ
ぞれが別々の所で個人の家で「まけないぞう」作
りを進めています。まだ引っ越しをして間もない
ため、ぞう作りもままならない人もいますが、
「家に居ても周りは知らない人たちばかりで、ぞ
うを作っていると心がなごむ」と言っています。
ある人は、「ぞうさんがなくなつたら手持ちぶさた
になると同時に、「何と言ってもまけないぞうは
唯一の励みになる」と言っていました。最近では、
「まけないぞう」が届いた方から、「勇気や
元気を頂いた」というメッセージが多く、作り手

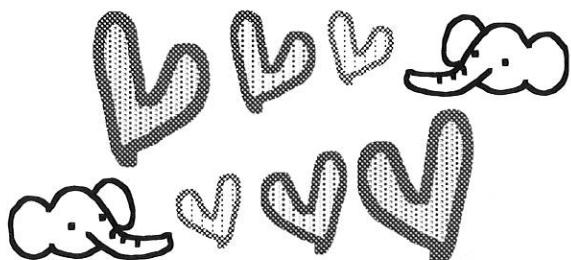
も「私たちみたいな者が人様の役に立ててボラン
ティアができてうれしい」と言っています。これ
はまさに一方通行の支援ではなく双方向の支援だ
と思います。「一本のタオル運動」に協力してくれ
る人、ぞうを作っている人、買って下さる方
と、それぞれが支え合い一つの「まけないぞう」
ができているのです。まさに人と人の架け橋とな
っているのです。一人一人色々な人がいて、遠く
離れていてバラバラでも、「まけないぞう」が
人と人、心と心をつないでくれています。私達ス
タッフもこの「まけないぞう」に心から感謝し、
もちろんそれを支えて下さっている、全国の皆さ
んにも深くお礼申し上げます。今年度も「まけ
ないぞう」を宜しくお願いします。

(被災地NGO協働センター 増島智子)

タオルの豆知識

日本にタオルが入ってきたのは？

明治5年、大阪税関の諸輸入品目の中に「浴巾
手拭2打、7円60銭」と記録に残っている。当時、
英國から輸入された綿タオルは肌ざわりの良いた
めか首巻にも使用されていたそうです。



新品のタオル・集めています



今、まけないぞうのタオルが不足しておりますので、こちらの方もご協力下さい。

「まけないぞう」 ありがとうキャラバン 四国編

無事に帰ってまいりました!!

3月2日に神戸を出発し、約2ヶ月間車部隊と歩き遍路部隊と二手に分かれ、四国を巡った「まけないぞう・ありがとうキャラバン」は4月25日に高野山で無事に満願を迎えました。これも四国の温かい皆様のお陰と深く感謝しています。

行つた先々では新しい出会い、偶然の再会とたくさんの「温かい心」、「ありがとう」に触れることができました。私たちは「まけないぞう」を通して本当に多くの貴重な財産を頂きました。「まけないぞう」はまるで幸運を運ぶ「愛の使者」のようです。

ここでその素敵なお会いを少々紹介します。西宮で被災された娘さんが、四国に戻られてからも精神的な心の傷から立ち直れず、「まけないぞう」で少しでも勇気づけられたらと思い、キャラバン隊の歩き遍路を2日間もお寺の前で待つておられました。このことで私たちは、まだ多くの方が震災の影響を深く心に残していることを改めて思い知らされました。また、徳島県では以前に南海大地震で被害にあわれた方が、神戸のこととも他人事とは思えない支援して下さいました。他には、私たちのこの活動に共感され涙を流されながら、ご寄附をされた方、仕出し弁当を作つて応援に駆けつけてくれた方、お母さんと一緒にタオルを持ってきてくれた小学生、仕事の合間にわざわざタオルを持ってきてくれたおじさん、徳島県で「まけないぞう」を購入し、また愛媛県でも協力してくれたお遍路さん、地元のつながりを生かして、「一本のタオル運動」に協力してくれた方、みかんをお土産にとくれたみかん屋のおばちゃん、徳の高いお話を頂いたご住職様、「まけないぞう」を買つてくれた被災地神戸のお遍路さんなど、まだまだ紹介しきれないくらいの方々に会いました。

前回の「ありがとう・キャラバン」もそうでしたが、今回も同様にこちらが「ありがとう」と言うつ

もりが、逆にたくさんの「ありがとう」を頂いたようです。このひとつひとつのつながりを大切に育み、皆さんと一緒にこの「まけないぞう」を大きく健やかに育てて行きたいと思います。そして、もっと皆さんに幸せを感じて頂けるように……

本当に四国で出会った皆さん、ありがとうございました。これからも「まけないぞう」を可愛がつてあげて下さい。

(1999年4月27日 神戸新聞)

震災ボランティア
神戸の大西さん

徒歩で四国巡礼、帰る

タオルグッズ奉納し 被災地の現状伝える

大西さんは三月一日、神戸を出発。被災地への支援

に対するお礼の気持ちを込めて、八十八カ所に「まけ

ないぞう」をつづつ奉納した。一方で、「西宮で被災

された娘が、四国に帰ってきた時に、お遍路さん

の仲間に迎えられた。今月二十五日、お札参りの地高野

山に無事到着し、協働センターの仲間に迎えられ

てくれる人も、タオル集めや「まけないぞう」の販売に協力してくれる寺も数多くあった。今月二十五日、お札参りの地高野山の仲間に迎えられた。一方で、「西宮で被災された娘が、四国に帰ってきた時に、お遍路さん

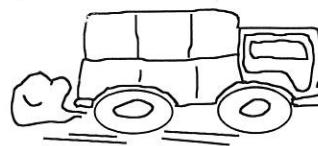
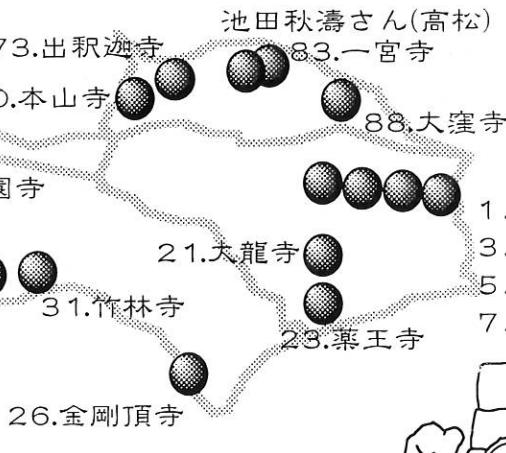
の仲間に迎えられた。今月二十五日、お札参りの地高野山に無事到着し、協働センターの仲間に迎えられてくれる人も、タオル集めや「まけないぞう」の販売に協力してくれる寺も数多くあった。今月二十五日、お札参りの地高野山の仲間に迎えられた。一方で、「西宮で被災された娘が、四国に帰ってきた時に、お遍路さん

の仲間に迎えられた。今月二十五日、お札参りの地高野山に無事到着し、協働センターの仲間に迎えられてくれる人も、タオル集めや「まけないぞう」の販売に協力してくれる寺も数多くあった。今月二十五日、お札参りの地高野山の仲間に迎えられた。一方で、「西宮で被災された娘が、四国に帰ってきた時に、お遍路さん

の仲間に迎えられた。今月二十五日、お札参りの地高野山に無事到着し、協働センターの仲間に迎えられてくれる人も、タオル集めや「まけないぞう」の販売に協力してくれる寺も数多くあった。今月二十五日、お札参りの地高野山の仲間に迎えられた。一方で、「西宮で被災された娘が、四国に帰ってきた時に、お遍路さん

被災者がくる象をかたどったタオルグッズ「まけないぞう」を奉納しながら、四国八十八カ所と高野山を歩いて巡った震災ボランティアが、約二ヶ月ぶりに神戸に戻った。行く先々で被災地の現状を語り伝えた旅。全国からお遍路さんや地元の住民に励まされたといい、支援の輪は大きくなかった。

(磯辺 康子記者)



受入先の寺院の方はじめ、ボランティアで参加して下さった方、各地でお接待を施して下さった方、そのほか四国各地の皆さまには本当にお世話になりました。改めてお礼申し上げます。



「まけないぞう」を手に、「1人でも多くの人に活動を知ってもらいたい」と話す仲川江さん（室戸市元）

広がれ「まけないぞう」の輪

阪神大震災被災者らタオル製造・販売

四国巡礼の一行 高知入り

阪神大震災の被災者が作った筆の形のタオル「まけないぞう」の販売が委託して、被災地と全国が心のキラッキボールを握る「まけないぞう運動」が四国遍場で展開されている。十五日、ボランティアブルーフラント集め販売協力し始めた活動。全国各地のボランティアブループなどが関東で運動を展開。今はその四国編として、四国八

万頭が全国に出、被災地で心の交流にも発展している。これまでに約八千頭が同センターのメンバーや四国内のボランティア三人が室戸市の不動堂で活動。メンバーの仲川徹さん（二十五）は室戸市垂水区では、「このタオルには作り手の『負けない』という気持ちが込められているんです。被災地では今でも精神的に閉じこもりがちな人もいる。八十八カ所巡りを通じて、神戸の今、作り手の思いを一人でも多くの人に知ってもらいたい」と話した。

(1999年3月16日 高知新聞)

自転車でまけないぞうキャラバン

被災地支援訴え銀輪行脚

熊本の2青年／神戸まで走破



被災地支援訴え 熊本・神戸間を自転車で走破した山口さん（左）と野田さん

今からでもできることを
まけないぞう P.R.

金額から寄せられたタオルを使い、震災の被災者が作る筆の形の「まけないぞう」。熊本県立熊本西高校卒業生活動部を統一する新高橋出身の学生たちが参加。大西さんなどのが参加。大西さんから同センターの自転車で出発した「人の育成事業」が十二日、神戸市に到着した。八時半で走破市。二人は昨年十二月、加開いた。二十日にはフェリーで再び神戸市を出発。ま繩の活動で知合った。地の現状を詳しく知った。旅の報告書をつづることにし

これは熊本県の高校生2人が、忘れられつつある大震災、また被災地の現状、震災が残した問題に关心を持つきっかけのため、また震災ボランティアに協力する手段としての「まけないぞう」と「一本のタオル運動」をボランティア施設などに紹介するために約9日間かけて、自転車で熊本から神戸を走りました。熊本県立熊本西高校を卒業した山口洋平くんと国立八代高等専門学校2年生の野田創太郎くんの2人です。

2人は「今回のキャラバンがでて本当に良かったと思います。少なくとも自分たちが神戸まで自転車で行くことでいくらかの『まけないぞう』が売れたり、『まけないぞう』のことを知つてもえたと思います。被災地に行って見たもの感じたことでは、アーケードの屋根が曲がたつままのところ、あちこちにあるサラ地、当たり前のようにある仮設住宅、プレハブの店、壊されていく仮設、建て始められる復興住宅の流れからわかる地域での交流の薄さ、仮設に取り残されるお年寄り、ところどころしか人がいない仮設、人工島の仮設（人はいない）と復興住宅（切り離されている）という現状がありました。

仮設住宅で交流も

賀長崎を経て二十四日、民団体「被災地NGO協働センター」でボランティアセーターとして活動を続ける新高橋出身の二人が、この日午後、協働センターの事務所に到着した。神戸市に到着する。神戸市垂水区では「まけないぞう」街角では「ご飯を食わない」とお金を手渡してくれる。宿泊場所を提供してくれた親切な人もいたという。岡山県立協同社会福祉協議会などを訪問した。今月八日、熊本市内を出発した。テントを張つて寝泊まりしながら各地の社会事業団など訪問しながら各地の出来事につき話し合った。二三人。「今からでも自分でできる」と云ふと自転車での神戸行きを許された。

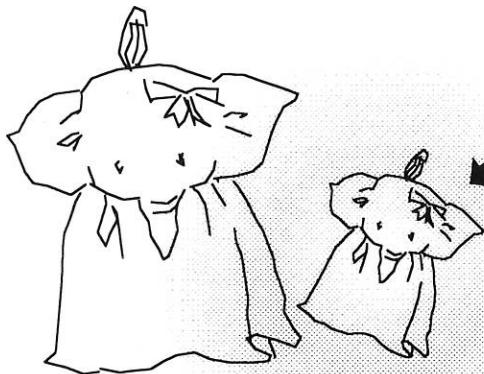
(1999年3月17日 神戸新聞)

神戸では約6日間の活動の中でも、まだたくさんの問題があるということはあります。これからも『まけないぞう』と『一本のタオル運動』にご協力下さい。」という感想を寄せて頂きました。

2人は最初、「人のために」、「神戸のために」何かをしたいといふ気持ちからスタートした自転車キャラバンでしたが、実際に現場を見てたくさんの勉強をし、「自分のため」にやっている気持ちになつたそうです。ボランティアという言葉だけが先行し、近寄りがたいなどと言われますが、案外、経験してみるとささいなことだつたり、楽しいことだつたりするものです。皆さんもぜひ、自分のやれることから参加してみてはいかがでしょうか。

山口くん、野田くん、お疲れさまでした。いつでも神戸に来て下さい。

まけないぞうに子どもが生まれました!!



パオといいます。
よろしくね。

その中で、山梨県の甲府ボランティアセンターでは21人のメンバーが集まり、全国で初めての「こうふ・パオの会」が結成されました。この会では月に2回パオ作りを開いています。メンバーの中には数名の男性がいて、その方々は材料管理をはじめ、ヒモを切つたり、リボンを結んだりと、裏方作業を担当してくれています。一方、作り手さんは「不況の影響で仕事に就けない被災者が多いはず。被災者への協力が出来るなら、遠く離れた甲府でも取り組んでいきたい」とおっしゃっています。また、「少しでも被災者の役に立てば。『パオ』には被災者に対する愛情がこもっていて、作っているとてもかわいいと」皆さん楽しんでこの会に参加されています。このコーディネーターをしているボランティアセンターの野田さんは「メンバーが中心となって活動が地域の中に広がり、一人暮らしのお年寄りや障害者の生きがいにつながれば」と言っています。

「パオの会・Tokyo」の代表の古市由希子さんは「被災者だけの『生きがい』ではなく、被災者・支援者に関係なく、この社会に存在している皆の『生きがい』作りに『まけないぞう』と『パオ』が係わっていけたらいいですね。」とこの活動を進めています。

ぜひ皆さんも「パオ」を作つてみませんか?

このように一方通行の支援だけでなく、双方向の支援を通して「支え合いの社会」を育んでいきたいと思います。このように「まけないぞう」がきっかけ・ツールとなり皆さん地域でも生かして下されば幸いです。

「パオ」は神戸の応援をするため、直接、被災地には行けないけれど、地元で何かお手伝いがしたいといつの人達が集まり、「まけないぞう」の半分の大きさで作っている子どもの会です。「パオの会・Tokyo」として1998年8月から関東を中心に活動の輪を広げています。「まけないぞう」と親子セットで700円で販売しています。

←これが親子ぞう



阪神被災者の生活支援



21人針仕事、タオル加工

「まけないぞう」は、神戸・奈良タオル「パオ」を作り、被災者支援する事業。市や西宮市の被災者が製作しており、タオルの一部を差し取って染め頭を作り、つり下げて使えるように加工した作品。「一九九八年から全国の市民グループなどを通じて販売していく」販売は一本四百円。その商品が製作者の収入になっている。九年八年以来、「まけないぞう」とセットで販売する子の会は運営して、親子は好評だ。

「まけないぞう」は、昨年十月に開かれた甲府ワーク・山の都ハートプロジェクトで「まけないぞう」の販売が開始された。販売したところがきっかけで、何らかの支援を継続していく。販売に携わったボランティアの間から大きな声が出たため、甲府市ボランティアセンターは「パオ」作りの講習会を開催。二十一人のボランティアが集まり、会の結成が決まった。

甲府のボランティアがグループ結成

甲府市内のボランティアが集まり、阪神大震災被災者の生活支援を行なう自立グループ「こうふ・パオの会」を結成した。被災者タオルを縫つて巻く形に加工したタオル「まけないぞう」とセット販売する子の会を同会のメンバーが作り、タルトの売上金の一部が被災者支援で寄付される。自主グループの結成は全国でも初めてという。メンバーは「震災の復興はまだ終わっていない。少しでも被災者の手助けができるは」と意気込んでいる。